

療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフケア充実に向けての調査研究
－COVID-19 流行の影響も踏まえて－

研究分担者 平原佐斗司 東京ふれあい医療生活協同組合研修・研究センター長

研究要旨

認知症者のエンドオブライフケアの研究においては、療養の場を超えて用いられる認知症の方の苦痛評価法の確立が必要である。分担研究者として、苦痛評価部会を立ち上げ、認知症の人の苦痛評価のプロトコル開発を行った。最初にレビュー論文や専門家の意見により、プロトコル（Ver1）を作成、そのフィージビリティ調査を行った、その結果、①教育コンテンツの開発の必要性、②呼吸困難の客観的評価法（RDOS）は、身体診察項目が多く多職種で使用しにくいことが明確となった。そのため、2023年度は、①呼吸困難の客観的評価法として、言語性妥当性を担保した日本語版 modRDOS-4を開発し、②同時に本スケールを組み込んだプロトコル（Ver2）を作成すること、③それらに関する教育ツール（教育用ビデオ、教育用リーフレット）を開発し、本プロトコルと教育教材についての妥当性、フィージビリティを検証するための実施調査を行った。

A. 研究目的

末期認知症者の苦痛について、在宅や施設、病院など療養の場の違いを超えて使用できる苦痛評価のプロトコルを開発する。

日本語版 modRDOS-4の開発を行い、これを組み込んだプロトコル Ver2を開発するとともに、本プロトコルの教育コンテンツ作成し、その妥当性を検証する。

B. 研究方法

* 言語的に妥当な翻訳版を作成する際に標準的に用いられる手順に則り、言語性妥当性が担保された日本語版 modRDOS-4を開発する

* プロトコル Ver1のフィージビリティ調査結果に基づき、これを改良したプロトコル（Ver2）を開発する

* プロトコル（Ver2）の教育コンテンツ（教育用ビデオとリーフレット）の作成と、看護、介護職を対象に、プロトコルと教育教材の妥当性、フィージビリティを検証するための実施調査を行う。

（倫理面への配慮）

* 言語妥当性を担保した modRDOS-4開発のための実施試験、プロトコルと教育教材の妥当性、フィージビリティを検証するための実施調査では当法人の倫理委員会で審査を行った。

C. 研究結果

2023年度は3回の会議を開催し、プロトコル（Ver2）を作成、上記の知見をもとに、日本語版 modRDOS-4開発、教育コンテンツ開発を手掛けた。

D. 考察

身体診察項目の多い呼吸困難の客観的評価法（RDOS）の使用が介護職には難しいという課題に対し、我々は2021年に Dr Wongによって開発された modRDOS-4の日本語を作成、プロトコルに組み込むことで実施可能性を高めることができると考えた。

まず、言語性妥当性が担保された日本語版 modRDOS-4を開発、これを組み込んだプロトコル Ver2を完成した。

さらに、フィージビリティ調査で教育コンテンツの必要性が明らかになったため、教育用ビデオとリーフレットからなる教育コンテンツを開発した。さらに、本プロトコルと教育コンテンツは介護、看護職にとって、充分使用可能であり、教育教材は有効であることを確認した。

E. 結論

療養の場を超えて、多職種で使用できる重度認

知症の方のための苦痛評価プロトコールとその教育コンテンツを開発した。

日本語版modRDOS-4と本プロトコールの妥当性のさらなる検証とともに、認知症の医療・介護現場への普及が課題である。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 平原佐斗司、鈴木みずえ、高井ゆかりら, 言語妥当性が担保された日本語版modRDOS-4の開発 日本在宅医療連合学会誌 第4巻4号 P9-16, 2023

2. 学会発表

- 1) 高齢非がん疾患患者の緩和ケア ～認知症の緩和ケアを中心に～第 65 回日本老年医学会学術集会 2023.6.17
- 2) 言語妥当性が担保された日本語版 modRDOS-4の開発 ～非がん疾患患者の呼吸困難のアセスメント改善を目指して～第 5 回日本在宅医療連合学会大会一般演題 2023.6.24
- 3) 療養の場所を超えて多職種で用いる末期認知症の苦痛評価プロトコールの作成 第6回日本エンドオブライフケア学会 (2023.10.2) 一般演題 口演

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし